大釈迦本宗　能忍寺

能忍寺たより

Vol.32

行事紹介

○四万六千日(ほおずき市)

浅草寺では七月九日、十日にわたりほおずき市が催されます。平安時代より、毎月十八日が観世音菩薩の縁日に充てられていましたが、室町時代の末期ごろから、「功徳日」という縁日が設られました。功徳日とは、その日に参拝すると特に多くの功徳が得られる日とされています。功徳日は寺社によって異なりますが、浅草寺では月に1度設けられています。特に七月十日は功徳があるとされ、この日に参拝すると四万六千日分の功徳があると言われています。なぜ、四万六千なのか諸説ありますが、一升の米粒が四万六千粒にあたり、一升と一生をかけたとも言われています。江戸時代になると、縁日の参拝が定着し、前日から参拝者でにぎわうようになった為、九日と十日が縁日とされました。ほおずきは「大人は持病が治り、こどもは虫気が去る」という民間信仰があり、ほおずきを求める人でにぎわったそうです。また、ほおずきには先祖の霊を導く灯りや魔除けとされることがありお盆棚飾りに用いる方も多いようです。より多くの功徳の得られる功徳日にぜひご参拝してみてください。

今月のことば

~仏の顔も三度~

どんなに柔和でおだやかな人でも、二度三度と迷惑をかけたら怒り出す、穏やかな人でも我慢に限度があるということ。聴きなじみのあることわざかと思いますが、由来はご存じでしょうか?インドには釈迦国とコーサラ国という国があり、コーサラ国の王の母が釈迦国出身の由緒ある王女と聞いていたが、実際はそうではなく釈迦国の策略だったことを知り、怒りから釈迦国を滅ぼそうとします。そこでお釈迦様は三回説得し、兵を追い返しましたが、四回目にはお釈迦様も恨みある業の報いは避けられないと説得せず、そのまま釈迦国は滅ぼされてしまいます。すでに意味を理解していることわざでも由来を知ると、また歴史的背景や文化などがわかりますね。

コラム　あれもこれも仏教用語

○機嫌

機嫌という言葉は、一般的には気分のいいとき・悪いときを表すときに使われる日常に根差した仏教用語です。もともとは「譏嫌」と書き、譏り(そしり)嫌う(きらう)という意味で仏教の戒律の名前でした。正しくは「息世譏嫌戒(そくせきげんかい):世間から僧侶が機嫌悪く思われることを息(や)めさせる戒め)」といって、集団生活の中でお互いが健やかに生活するため、あるいは世間から尊敬されるべき存在であるために僧侶が守るべき戒律として成立しました。例えば「お酒を飲まないこと」やニラやにんにくなどの「五辛を食べないこと」も譏嫌の戒めに入り、これを守ることで非難を受けるような行動をしない、「譏嫌」を受けないような行動が大事であるとされました。やがて「機」が「機転」などの細かい心の動きの意味を持つことから「機嫌」という表現になり、他人の内心や思惑、様子といった意味を持つようになりました。

はじめての仏教

○お釈迦様、教えを広める

ついに悟りを得たお釈迦さまですが、自分の悟りは簡単には理解されないだろうと考え、人々に語ることを躊躇いました。しかし古代インドの神である梵天は「お釈迦様の得た悟りこそが仏の真理であり、人々にその教えを広めなければこの世が滅んでしまう」と言って、説法を行う後押しをしました。これを梵天勧請(ぼんてんかんじょう)といいます。

お釈迦様が最初に教えを説いたのは、かつて共に苦行を行った五人の修行仲間でした。当初五人は苦行を捨てたお釈迦様を拒みましたが、その迷いのない姿に心を打たれ、苦しみにまつわる「四諦」、苦しみを克服するために極端を避ける「中道」「八正道」を説かれるお釈迦様の説法に聞き入ったとされます。この最初の説法は、仏の教えである「法」の輪を初めて回したという意味で「初転法輪(しょてんぼうりん)」と呼ばれます。五人はお釈迦様の初めての弟子となり、僧侶の集まり「サンガ」が誕生しました。こうして仏(お釈迦様)、法(教え)、僧(教団)の「三宝」が揃い、仏教が成立したのです。

身分制度の厳格な古代インドで、国王から盗賊まで身分や職業、性別、生い立ちを問わずにお釈迦様は教えを説きました。これは画期的なことで、お釈迦様の名声は高まり、悟りを得てからわずか半年で仏教の大教団ができあがることになります。